

川方城跡第2次発掘調査

はじめに

川方城跡(かわかたじょうあと)は、津市川方町にある戦国時代の城跡です。ここでは、古くから大規模な土塁(どるい 土でできた城壁)と東西二つの曲輪(くるわ 城の中心となる平坦地で、城主や家来がいるところ)の存在が知られていました。

川方城跡は、雲出川(くもずがわ)を見下ろす台地の南端にあり、東には木造城跡(こつくりじょうあと)、西には戸木城跡(へきじょうあと)という木造氏の重要城館に囲まれています。対岸には、北畠氏

(伊勢国司家)の拠点であった天花寺城跡(てんげいじじょうあと)があります。

明治時代に書かれた、『伊勢名勝志』には、川方城跡が、永禄 11 年(1568)に木造具政(こつくりともまさ)の三男であった川方隼人佐(かわかたはやとのすけ)によって築かれ、天正 12 年(1584)に廃城になったという記事が載せられています。

中世の史料では、北畠顕泰(きたばたけあきやす 伊勢国司家2代)の子息に「河方親永」(かわ





かたちかなが)という人物がおり、その子親泰(ちかやす)から親兼(ちかかね)、宗範(むねのり)の4代が確認できます。

平成 18 年度には、東側の曲輪の発掘調査が行われ、戦国時代の溝や土坑(どこう やや大きな穴)がみつき、同じ時代の皿や鍋(なべ)、釜(かま)などの生活用具、少し古い奈良時代の土器が出土しました(第1次調査)。

令和7年に、西側の曲輪で住宅開発が実施されることになり、同年7月18日から8月20日に城跡の記録を残すための発掘調査を行いました。

発掘調査では、前から知られていた土塁のほか、戦国時代から江戸時代の生活の跡がみつかりまし

た。以下、その様子を述べることにします。

1 戦国時代

(1)土塁

発掘調査区の東と南に、土塁がありました。発掘調査では、土塁の断面を観察することができました。土塁は、高さ 2.5m程、幅5m程の大規模なもので、西の曲輪から東に向けて積まれていました。土塁の外側には堀はありませんでした。この土塁は外部からの侵入を防ぐものではなく、東の曲輪と西の曲輪を区画するものだと考えられます。

(2)建物跡

発掘調査区の南端近くで、建物跡の柱穴がみつかりました。柱穴は大きく、深さも 40 cm 近くありまし



黄色い土の上にある黒土から上が土塁の盛土です



建物跡 柱の穴は大きく深いものでした

た。建物の向きが土塁2と一致しています。

発掘調査区からは、戦国時代の皿や鍋が出土しているので、みつかった建物もこの頃のものだと考えられます。

(3)土坑

発掘調査区の中央付近で、細長い穴がみつかりました。穴の中からは、戦国時代の皿や鍋・釜が出土しました。

2 江戸時代

(1)井戸

発掘調査区の中央付近で、江戸時代の井戸がみつかりました。井戸は常滑製品の大きな枠が何段も積まれていました。

井戸の中からは埋め戻しの時に入れられた瓦が大量に出土しました。発掘調査では建物は見つかりませんでしたが、城があった場所は江戸時代になると、畑地や屋敷地となっていたのではないかと考えられます。

(2)埋設土器

発掘調査区の南端付近で、銅銭が入れられた常滑製品の甕が出土しました。



常滑焼の井戸枠が使われていました



底に銅銭が入れられた甕

入っていた銅銭は錆が進んで、何という銭かはわかりませんでした。

屋敷地の地鎮(じちん 土地の神をまつる行為)に使われたものかもしれません。

3 築城以前

土塁盛土の下からは、土塁が積まれる前の時代の柱穴がみつかりました。発掘調査区からは、飛鳥時代から奈良時代のものと思われる土師器片(はじきへん)が出土していますので、この時代にも人が住んでいたと思われます。

この時代の土器は、1次調査でも出土しており、遺跡周辺に飛鳥時代から奈良時代の集落があった可能性が出てきました。



土塁盛土の下から柱穴がみつかりました

まとめ

第1次調査の結果とあわせると、川方城跡には東西2つの曲輪があり、その間には土塁があることがわかりました。土塁の両側には堀はなく、土塁は二つの曲輪の境を分けるためのものであった可能性があります。しかし、曲輪を区画するだけのために、これほど大きな土塁が築かれた理由についてはよくわかりません。

2つの曲輪からは、建物跡と思われる柱穴がみつかりました。建物は穴を掘り、柱を据えた掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)でした。発掘調査区からは、戦国時代の皿や鍋、釜がみつかったので、建物はこの頃のものであった可能性があります。

江戸時代になると、城は廃され、この地は畑や屋敷地になったようです。敷地内には井戸や瓦葺の建物、地鎮のための埋設土器などがあったようです。

下川遺跡と戦国時代の雲林院

はじめに

津市芸濃町雲林院(うじい)の下川遺跡(おりかわいせき)は、雲林院集落の東、雲林院城跡(うじいじょうあと)から500mほど離れた場所にある遺跡です。ここでは、平成3年(1991)に県道改良工事に伴う発掘調査が行われ、弥生時代後期(今から約2,000年前)の溝や戦国時代(今から約500年前)の集落跡が見つかりました。

令和7年3月に下川遺跡の発掘調査報告書がまとまりましたので、下川遺跡から出土した遺物から、戦国時代の雲林院についてみていきたいと思います。

発掘調査でみつかった戦国時代の集落跡からは、掘立柱建物のほか、方形石組遺構(ほうけいいしぐみいこう 石を四角く積み上げた穴)がみつかりました。

周辺からは、金属を溶かす時に使う鞆(ふいご)や、溶かした金属を鋳型(いがた)に注ぐ時に使う

取瓶(とりべ)も出土しました。これらのことから、この遺構は、金属を溶かしたり、加工したりする工房跡(こうぼうあと)の可能性にあります。

戦国時代の雲林院には、刀鍛冶(かたなかじ)が住み、刀や槍を作っていました。現在、三重県指定有形文化財となっている槍には、この地にいた刀鍛冶と思われる「雲林院住包治」(うじいじゅうかねはる)の名が刻まれたものがあります。

戦国時代末から江戸時代初めの雲林院氏からは、塚原ト伝(つかはらぼくでん)から剣術の奥義(おうぎ)を授けられ、安土城の留守居役を務めた雲林院松軒(うじいしょうけん)や、柳生新陰流(やぎゅうしんかげりゅう)の皆伝(かいでん)を受けた雲林院弥四郎(うじいやしろう)が輩出(はいしゅつ)しています。下川遺跡でみつかった「工房」や金属加工関連の遺物は、これら刀鍛冶に関連し、雲林院氏の尚武の風を現わすものかもしれません。



石組の「工房」跡



取瓶(溶かした金属を鋳型に注ぐ道具)

まいぶん津 第17号

発行日:令和7年10月2日

編集発行:津市埋蔵文化財センター

〒514-0058 三重県津市安東町1225

TEL 059-229-0210

FAX 059-229-4601

